

協同学習を英語で行う英語授業のための「英語表現集」の効果

金丸 紋子 カリタス女子中学・高等学校

1. はじめに

(協同学習と英語授業の現状)

昨今、全国の中学・高等学校教育において、グローバル人材の育成を目指した様々な取り組みとして、「アクティブラーニング」が非常に注目されている。アクティブラーニングの一例として、生徒中心型授業・課題解決型の授業等が挙げられるが、このような授業をグローバル人材育成に繋げるには、まずは学習者一人ひとりが「仲間と共に学び合い、教え合う基礎力」を身に付けることが大切である。つまり、シンプルなペアワーク・グループワークを、互恵的な関係を保ち、きちんと実行する力が必要となる。「協同学習」は、その力の定着に効果的な学習方法であると言われている。

協同学習の基本原理や理念は、様々な学者が様々な表現でまとめているが、本稿では Jacobs & Goh (2007) の提唱する要素を説明する。

- 1) 「Positive Interdependence」互恵的な協力関係がある。目標に向かって、グループ全体で協力しあう。
- 2) 「Individual Accountability」個人の責任が明確である。目標を達成するために、それぞれが責任を持って取り組む。
- 3) 「Equal Opportunity to Participate」グループ全員の活動への参加や発言の機会が平等である。
- 4) 「Maximum Peer Interactions」グループメンバー同士のやりとりが最大限になされている。

この要素が巧妙に組み込まれることにより、ペアワークやグループワークが意味深い学びに

なるのである。授業に取り入れる活動に如何にこの4つの要素を取り組むことができるかを、教師が意識することが重要である。勿論、一つの活動に4つ全ての要素を入れ込むことが困難なこともある。その場合は、学習活動全体のシーケンス（一連の流れ）の中で、4つの要素がバランスよく存在するように意識することが大切である。

英語の授業に協同学習を取り入れる際に、英語でディスカッションをすることは避けて通れない。しかし、中学生・高校生にディスカッションを英語で行わせると、自分の意見はなんとか表現できたとしても、ディスカッションとしてはぎこちなく、会話のキャッチボールがなかなか続かないことがわかった。例えば、話し合いを始めようとしても「何から話し合おうか」、「私が先に意見を言ってもいい?」、「次はあなたの番よ」、「私の解答は正しいのかわからないけど・・・」といった、コメントや表現（ディスカッションの潤滑油になる部分）を英語で表現できず、話し合いが滞ることも多かった。

そこで協同学習を円滑に行うための教室英語リスト“Useful Expressions for Implementing Cooperative Learning in the English Classroom” (Asakawa, Kanamaru, Plaza, & Shiramizu, 2013)を作成した。本論文では、このリストを利用した英語授業の実践報告を紹介する。また、対象生徒に行ったアンケートの結果、リストの効果的な利用方法、今後の展望にも触れる。

2. 協同学習を英語で行うための表現集

本表現集（以下「リスト」）は、主に以下のように分類されている。

1) Questions

- Confirming
- Making requests/Asking for permissions
- Asking for opinions
- Various requests

2) Responses

3) Fillers（つなぎ言葉）

4) Sustainers（メンバーとのやりとり）

- Facilitating/
Action-initiating functions
(みんなが参加する活動にする時)
- Interactive functions
(やりとりに便利な表現)
- Cheerleading functions
(互いに支え合う)

リストに掲載されている表現は、以前に日本語を用いた協同学習を行っていた際に、実際に生徒が発言したものをベースとしている。また、定期的に生徒と共に振り返りを行い、生徒の要望に応じてリストに新しい表現を加えるようにしている。また、リストに使われている表現は全てワードプロファイラーを通して、General Service List (GSL) の基礎レベル (K-1, K-2) の単語であることも確認されている。

このリストには各項目の横にチェックボックスが付いている。このチェックボックスの扱い方は様々である。例えば、活動中に発言した表現を記録として✓を入れることで、より多くの表現を用いようとする意識付けにつながるであろう。また、ディスカッションの前に、「どんな表現を使ってみようか」想像し、心の準備をするために✓を入れてみるもの良い。(図1)

図1 Classroom English 表現集の一例

3 FILLERS									
3-1	～かなあと思ってただけだ。	I was wondering ～.							
3-2	間違ってるかも。	It may not be correct.							
3-3	そうだなあ、	Let me see/think～.							
3-4	～でしょ。	～, you know. / You know. ～. / ～, right?							
3-5	あのね、	You know what ?							
3-6	良く分からないけど、	I'm not sure but ～.							

また、活動が続ける中で学んだ新しい表現を

書き込むことができるように、ブランクの表もつけてある。更には、付録として文法用語で英語訳した一覧表と、この「英語表現集」をどのように使うことができるのかを例示したサンプル表現も付け加えた。

3. リストの活用方法

このリストは、比較的日常的に行われる活動に用いることができる。宿題の答え合わせが一例として挙げられる。ペアワークやグループワークを用いて答え合わせをすることで、それだけでも生徒同士の英語による「やりとり」は生まれ、英語に触れる機会も増えるため、英語の授業を「英語」で学ぶ一歩となる。

また、エッセイライティングやディスカッションに向けたブレインストーミングを、リストを片手にさせることも可能である。勿論、ブレインストーミングだけでなく、ディスカッションそのものにも使うことができる表現も多く掲載されている。特に、ディスカッションの最中に仲間同士で互いにコメントすることも促進でき、コミュニケーション能力を包括的に引き上げることが期待できると考える。

4 効果的な導入方法

実際にリストを用いてディスカッションを行うには、学習者がリストの表現に慣れておく必要がある。そのためにも、リストの使用範囲を指定したり、発音練習を丁寧に行ったりするなどの事前ケアが大切である。また、様々な表現を自由に使い回せるようになるためには、教師によるモデルの提示も不可欠である。なるべく teacher talk の中に、リストの表現を入れ込むことで、学習者もリストに載っている表現の生きた使い方に触れ、参考にすることができる。

このように、学習者が英語で英語を学ぶための足場を巧みに組み与えることで、徐々に英語使用を増やし、英語の表現力に自信を持たせることが期待できる。

5. 効果の測定（生徒の声）

2015年3月に、このリストを用いた英語のディスカッション等の活動に関するアンケートを実施した。対象生徒は、2015年3月時点で高校1年生の97名とした。この生徒は実際に協同学習形態で英語の教育を5年間受けており、概ね協同学習に対して肯定的な姿勢である。アンケート対象生徒が中学3年時（2013年）にリストを作成・配布し、2年間授業で使用してきた。

質問内容は、以下の通りであり、5つの選択肢の中から当てはまるものを選び、更にその理由を記述する形式である。

Q1) ディスカッション内での発言のしやすさ

Q2) リストにない表現の発言の容易さ

（自ら文を作り上げないとならない部分。主に個人の考えや主張そのもの。）

Q3) 英語で話をする自信の向上

Q4) 英語学習に対するモチベーションの向上

アンケートの結果（表1）より、このリストが授業内での生徒のやりとりに非常に効果的であることがわかった。とりわけ、Q2の肯定的な回答が多数を占めたことから、生徒達がリスト上の表現を単純に使うだけでなく、その表現を用いることで、発話しようとするモチベーションも促進され、「相手に言いたいことが伝わった」達成感も生じていると推測できる。

表1 リストの効果測定 アンケート結果

	非常に 思う (%)	そう 思う (%)	どちら でもない (%)	あまり そうは 思わな い(%)	全く そう 思わ ない(%)
	[肯定的回答(%)]			[否定的回答(%)]	
Q1	19.6	56.7	17.5	5.2	1.0
	[76.3]			[6.2]	
Q2	29.9	61.9	6.2	2.1	0.0
	[91.8]			[2.1]	
Q3	22.7	64.9	8.2	3.1	1.0
	[87.6]			[4.1]	
Q4	33.0	51.5	15.5	0.0	0.0
	[84.5]			[0.0]	

自由記述の生徒の感想の一部をここで紹介する。

・班のメンバーと頑張って、なるべく沢山の表

現を使おうとして、楽しかった。

- ・リストが手元にあるから、すぐに確認できて良かった。
- ・友達と英語での会話が増え、楽しかった。
- ・授業で習ったことが会話に生かされたから、英語の力がついたら実感した。
- ・英語でやりとりが出来て、なんだか格好良かった。
- ・よく使う表現は自然と頭に入るようになった。
- ・つなぎの言葉も英語で話せたので、そのまま自分が伝えたいメインの部分も英語で表現しやすくなった。
- ・つなぎの言葉を言っている間に、自分が伝えたいことを英語で整理することができた。聞き手にも「言おうをしているよ。」というアピールができた。
- ・最初の一言で、大まかな自分の主張（賛成 or 反対など）を伝えることができた。
- ・上手く返事ができたり、相手に話題を振ることができる、内容も深まった。
- ・反対意見だった時に言いやすかった。
- ・それでも自分で考えなければならぬことも多かった。
- ・相づちを打ったりしていると、会話をしている充実感があつた。相手の意見にコメントできた時は、なおさらそう思った。
- ・コメントを少しするだけでも、安心感とか会話のリズムが違う。
- ・自分の意見を、自分の英語力以上に発信できる気がする。
- ・会話が途切れないようになった。
- ・リストの表現を探すのに時間がかかった。

6. 効果の測定（会話録音分析とその考察）

3. で扱った結果は、生徒の主観的な判断も多く含まれる。より客観的に生徒によるリストの活用を追求するため、2015年度高校2年生（3. でアンケート対象となった同じ集団）の授業内で、ディスカッションやエッセイライティングの前に行うブレインストーミングやディスカッションそのもののやりとりを、数回にわ

たり録音した。

録音した生徒の活動の特性上、あまり「Questions」や「Responses」のカテゴリーにある表現を必要としなかったため、この2つのカテゴリーの中にある表現の使用はあまり目立たなかった。一方、非常に頻繁に使われたのは、「Fillers」と「Sustainers」のカテゴリーに相当する表現であった。中でも、「Fillers」と『Cheerleading functions』（「Sustainers」のサブカテゴリー）にある表現は、短く、簡単にやりとりの中に投入できるためか、頻繁に使われていた。

5. の自由記述の中にもあるが、「Fillers」は、相手に「自分自身がやりとりに参加している」、「自分が発言をしようとしている」という自身の存在をアピールすることを可能にさせる。これにより、仲間とのやりとりの中に自分自身がしっかりと存在するという「自己肯定感」を感じることができるのだろうと推測する。また、『Cheerleading functions』にある表現は、仲間の発言にコメントしたり、相手に関わろうとする姿勢を言葉で伝えたりすることができるため、仲間との「繋がり」が強まる傾向にあると考えられる。更には、どちらのカテゴリーの表現も、使用することで「やりとり」に主体的に参加する「自信」も高められると考える。

このような「自己肯定感」、「人との繋がり」、「自信」を、Deci & Ryan (1985) が提唱した「Self Determination Theory (自己決定論)」という動機付け理論に基づいて考察することができる。Deci & Ryan によると、人は生まれながらにして3種類の心理的欲求を持っており、その3つの欲求が満たされる時、人間は物事に取り組もうと内発的に動機づけられるのである。3つの欲求とは、1) 目標を達成したいと思う「有能性 (Competence)」、2) 周囲の人と繋がりを持ちたいという「関連性 (Relatedness)」、3) 自主的に自分の力で取り組みたいという「自律性 (Autonomy)」である。この3つの欲求が十分に満たされると、内発的動機付けが芽生え、特に学びにおける大きな作

びが期待できると言われている。よって、今回の録音分析により、生徒達は互いに認め合い、支え合い、やりとりを行う中で、内発的動機付けが高まりつつあると推測できる。

しかし、同時に「自立性」にも目を向ける必要がある。今後は、生徒たちが「自主的に英語でやりとりをしよう」と思うように、授業中のやりとりの使用言語の選択を生徒達に与え、少し難しそうな活動や内容のディスカッションにも果敢に挑戦するよう奨励していきたい。また、Can-do リストの視点から考えると、英語でのやりとりを経験させることで、「普段の生活」の中にあるシーンを英語で出来るようになっていくということを実感させる必要がある。単純に生徒にやりとりをさせるのではない、教師による巧みな「声掛け」や「コメント」が鍵となるとも考える。

7. 今後の展望とまとめ

今後は、リストの表現の分類方法を、より学習者が探しやすいように工夫をする必要もある。分類方法を見直し、工夫を重ねていくことで、より手軽に使うことのできる補助教材としていきたい。

協同学習をベースとしたアクティビティーを英語で行うことで、自然と学習者同士の発話を増やし、英語でのやりとりに自信をつけさせることがわかった。そしてこのリストは、グローバル人材に求められる様々なスキルを、英語で行うアクティブラーニングを通して学習者が身に付けていくための一助となりうるであろう。

<引用・参考文献>

Asakawa, M., Kanamaru, A., Plaza, T., & Shiramizu, C. (2013). Useful Expressions for Implementing Cooperative Learning in the English Classroom. (Handout of JACET 52nd International Conference 2013). JACET.

Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). Intrinsic motivation and self-determination in human behavior. New York: Plenum.

Jacobs, G. M., & Goh, C. M. C. (2007). Cooperative learning in the language classroom. Singapore: SEAMEO Regional Language Centre.